

聖書は、女性が教会で指導的な職務や奉仕を担うことを禁じているのでしょうか

フィリップ・B・ペイン (Philip B. Payne) © 2023 Payne Loving Trust

(ドイツ語訳: Hans-Jörg Ronsdorf、ガビ・ジンガー (Gabi Singer)。ご厚意による許可を得て)

この講演とパワーポイントのプレゼンテーションは、www.pbpayne.com から (英語で) ダウンロードできます。そこには、ここでは一部しか載せていない古代ギリシア語テキストの画像がすべて収められています。

ケンブリッジ大学で博士課程の研究を始めたころ、ある講師がこう言いました。「新約聖書の中で、本来の文脈において正しく理解されるなら、女性の奉仕を制限している箇所は一つもない。」私は思わず立ち上がって、「それは違う！」と叫びそうになりました。

この講演は、過去50年にわたる私の研究成果をまとめたものです。その研究によって私は、指導的な立場にある女性に対する**四つの主要な反論**について、考えを改めることになりました。

反論1：聖書は、男がかしらであると教えている。

言い換えれば、教会でも家庭でも、指導するのは男性だけであるべきだ、ということです。この考えは、コリント人への手紙第一11章3節の「**男は女のかしらである**」という訳に基づいています。ドイツ語では (他の多くの言語でも同様に)、「かしら (Haupt)」という語は今日しばしば「〜の上に立つ権威」を含意します。しかし文脈から分かるのは、パウロが「**男は女の起源である**」という意味で語り、それによってアダムのことを指していた、ということです。「源」という意味での「かしら」は、12世紀以来ギリシア語の辞書に載っています。¹

権威は、ギリシア語の「かしら」の一般的な意味では**ありません**でした。最も包括的なギリシア語辞典は、この語について49の比喩的な意味を挙げています。そのどれにも権威は含まれていません。²

世俗の古代ギリシア語の辞書の多くは、この語が権威を意味する例を一つも挙げていません。私が世俗のギリシア語辞書の中で見つけた、**権威**という意味でのこの語の**最も古い用例**は、紀元4世紀のもので、ギリシア語の辞書は、**権威**という意味での**頭**をビザンツ時代あるいは中世の用法としています。つまり、パウロが書いたずっと後のことです。ですから、パウロが**かしら**という語で**権威**を表そうとしたとは考えにくいのです。

パウロの時代に広く用いられていたヘブライ語聖書のギリシア語訳 (七十人訳) も、**権威**がこの語の一般的な意味では**なかった**ことを裏付けています。³ 七十人訳は、物理的な頭 (Haupt/Kopf) を指すヘブライ語の表現を、ほとんど**いつも**この語で訳していますが、「かしら」が「**指導者**」を意味する場合には、ほとんど**一度も**この語を使っていません。

ヘブライ語の**かしら**という語が指導者を意味する例は180あります。この180例のうち、ギリシア語の七十人訳が「指導者」の比喩としてかしら (kephale) という語をはっきり用いているのは、

ただ一例だけです。「かしら」が「指導者」を意味するとされる**その他の**例はすべて、3世紀にオリゲネス（Origenes）が加えたものです。しかも文脈から明らかのように、それらは「指導者」とは別の意味であるか、あるいは「かしらとして」⁴と訳されています。ギリシア語の読者はこれを、「かしらである」というよりも「かしらのように」という意味に理解できたのです。⁵

パウロが用いる**かしら**の12の比喻のうち、**権威**という意味を必要とするものは**一つもありません**。十の比喻は**源**あるいは起源を表し、残りの二つは**頂点**、最高点を表しています。⁶

女性を教会の指導から締め出すことは、聖書の中で女性指導者が数多く肯定されていることと相いれません。パウロがローマ人への手紙16章で奉仕の同労者として名を挙げている10人のうち、7人は女性です。その中には、「ケンクレアにある教会の執事（女性執事）」であり、「多くの人の、そして私自身の指導者（ギリシア語 prostatis）⁷」であるフィベや、夫と同じく「使徒たちの間で際立っていた」ユニアがいます。⁸

まとめると、こう言うことができます。世俗のギリシア語辞書、ギリシア語聖書、パウロの言葉づかい、そしてパウロが教会の指導における女性を肯定していること——これらはすべて、パウロが「かしら」で「権威」を意味していなかったことを示しています。聖書はどこにも、女性に対する男性の優越や指導的役割を教えていません。

反論2：テモテへの手紙第一2章12節は、「私は、女が教えたり、男の上に権威を持ったりすることを許しません」と教えている。

これを一般的な禁止と受け取るなら、テモテへの手紙第一の中で偽教師に惑わされたとされている人々が**女性だけ**であること、そしてこの手紙が特定の**地域的な問題**⁹を扱っていることを見落としてしまいます。

さらに、この訳は**四つ**の理由から疑わしいのです。

第一に、旧NIV（New International Version）が「権威を持つ」と訳しているギリシア語 **authentein** は、「**権威を握る**」と訳するのが最も適切です。この語がはっきり「権威を行使する」という意味で使われている**最初の**用例は、**三世紀も後**になってようやく現れます。¹⁰ 新約聖書では、「権威を行使する」には別の語が使われています。パウロの時代、この語は「支配する」か、あるいはもっと多くの場合（21回）、「権威を奪い取って自分のものにする」という意味でした。

ですから、欽定訳（King James Version）の方がより正確な言い回し、「**権威を奪い取る**」を採用しています。新約聖書の標準的な辞書は、この語を「独立した権威の立場を**取る**」と定義しています。2011年版のNIVは、訳を「**権威を僭称する**」と修正しました。

第二に、パウロは「教える」と「権威を握る」をつなぐ接続詞（そして）を、典型的には**一つの**考えを伝えるために用いています。¹¹ したがって彼が女性に教えることを禁じているのは、女性があるために権威を奪い取る場合**だけ**です。この箇所は、同じ町でアポロを教えたプリスキラのように、認められた教える権限を持つ女性を制限するものではありません。パウロはテモテへの手紙第二で、彼女によろしくと伝えています。

第三に、「私は許しません」は誤解を招く訳です。ギリシア語のこの動詞は、通常、一時的なことに関わり、永続的なことには関わらないからです。その文法形式が永続的な禁止を表すことはまれです。通常それは、その時点で効力を持っている許可や禁止を指しています。ですから「私は（今は）許していません」と訳されるべきです。これは普遍的な禁止というより、エペソにおける当時の危機に関わるものです。

第四に、もしこの節が女性に教えることを永続的に禁じているのなら、この節は、女性が教えることについて聖書が肯定的に語っている多くの箇所と矛盾します。

神は、靈感による聖書の重要な箇所を女性を通して啓示されました。ミリアムとデボラの歌、ハンナの祈り、アビガイルの預言、レムエル王の母の靈感によることば、エリサベツの祝福、そしてマリアの賛歌（マグニフィカト）——これは聖書の最初のキリスト教的解釈です。¹²

ですから、テモテへの手紙第一2章12節が扱っているのは特定の問題、すなわちエペソの教会で惑わされて誤った教えを広めていた女性たちのことです。この箇所は、その教会の女性たちが権威を奪い取って男性に教えることを禁じています。プリスキラのように、認められた教える務めをもって教える女性たちは、そのような権威を奪い取ることはないでしょう。パウロは、あらゆる場所で、あらゆる時代に、女性が教えることや男性の上に権威を持つことを禁じているのではありません。

反論3：女性 は 地域教会の長老、監督、牧師 になってはならない。聖書は地域教会の指導に男性だけを想定しており、女性を想定したことは一度もないからである。

実のところ新約聖書は、キリスト以外には、だれ一人——男性であれ女性であれ——名前を挙げて監督あるいは牧師と呼んではいません。

ヨハネが「長老」と呼ばれ、ペテロが「同じ長老の一人」と呼ばれるとき、それは地域教会のことではありません。彼らが使徒としての目撃者として、全体の、つまり世界中の教会の長老であったということです。

聖書の中で、地域教会の指導を表す特定の肩書きが与えられている人物は、ただ一人しかいません。「ケンクレアにある教会の執事（女性執事）であるフィベ」です。「フィベがその教会の『一人の（あるいはおそらく〈その〉）執事』と呼ばれていることは、事実上**確実**である。」¹³

パウロは、すべての信者が監督あるいは長老になるよう励まして、こう言います。「次のことばは真実です。もしだれかが監督の職に就きたいと思うなら、それは立派な働きを求めることである。」¹⁴

テトスへの手紙1章の長老の資格の主語も、やはり「だれでも」です。ギリシア語の原文では、どちらのリストにも「彼は」「彼を」「彼の」という語は一つもなく、男性に限る**そのほかの**（文法上の）制限も一切ありません。これは、たいていの英語やドイツ語の訳とは違うところです。

「一人の妻の夫」という資格が女性を除外していると考え人もいますが、家父長制あるいは補完主義を代表する論者であるダグラス・ムー（Douglas Moo）とトマス・シュライナー（Thomas Schreiner）でさえ、これが女性を除外しないことを認めています。¹⁵ 墓碑銘を見ると、「一人の妻の夫」が結婚における忠実さを表す慣用句であったことが分かります。¹⁶ 慣用句を、**区別を設ける要件**として扱うのは誤りです。¹⁷ フィベは執事でしたし、テモテへの手紙第一3章11節では、**執事**の資格の中に**女性**の資格が含まれています。ですから、次の節の「一人の妻の夫」が女性を除外することは当然ありえません。

4世紀の家父長制の代表者であるヨハネス・クリュソストモス（Johannes Chrysostomus）でさえ、「一人の妻の夫たち」は女性執事にも当てはまる、と書いています。¹⁸ 彼は、ギリシア語の男性形が女性を除外しないことを理解していました。新約聖書には、女性を含まなければならない、あるいは含みうる男性形が7500から8000あります。およそ一節に一つの割合です。¹⁹ ゴードン・ヒューゲンバーガー（Gordon Hugenberger）が示したように、男性に向けられた聖書の要件が**女性**にも当てはまるのはよくあることです。²⁰

反論4：パウロは三度にわたって、「女は教会では黙っていなさい」と命じている（コリント人への手紙第一14章34～35節）。

コーランの初期の写本にはかなりの異読が含まれているにもかかわらず、イスラムは広く、コーランの本文は一度も変えられたことがないと教えてきました。これに対して教会は、オリゲネスの時代以来、写本に異読があることを常に認めてきました。「聖書の無誤性に関するシカゴ声明」の第10条は、「聖書の写本と翻訳は、原典を忠実に再現している限りにおいて神のことばである」と明言しています。本文批評の学問的な原則によって、現存する何千もの写本から、新約聖書の元の本文を驚くほど正確に復元することができます。マルコの福音書の最古の写本には長い結び（マルコの福音書16章9～20節）が含まれておらず、それがマルコの元の本文にはなかったことを示す説得力のある証拠があります。長い結びは18節で信者たちに、「その手で蛇をつかみ、たとえ毒を飲んでも決して害を受けない」と約束しています。これは元の本文にはなかったもので、教会に対する神の権威あるメッセージではありません。同じように、コリント人への手紙第一14章34～35節も、パウロの元の手紙にあった場合に**限って**権威を持つことになります。

写本から導かれる**七つ**の理由と、これらの節の言葉そのものから導かれる**九つ**の理由によって、私も、そしてほかの多くの人々も、これらの節がパウロの元の手紙ではなく、後から付け加えられたものだと確信しています。ここでは、そのうち三つだけをまとめておきます。

第一に、これらの節の明白な意味は、この章の中の、「**みな**」が教え、預言してよいという言明と矛盾し、また11章5節の、女性が預言しているという記述とも矛盾します。

第二に、パウロ書簡の写本には、これほど長いテキストが、（異なる写本の中で）これほど互いに離れた二つの異なる位置に、はっきりした理由もなく置かれている箇所はほかにありません。

第三に、最古の聖書は、これらの節を後から加えられた真正でない付加として示しています。²¹

では、これらの点について詳しく見ていきましょう。

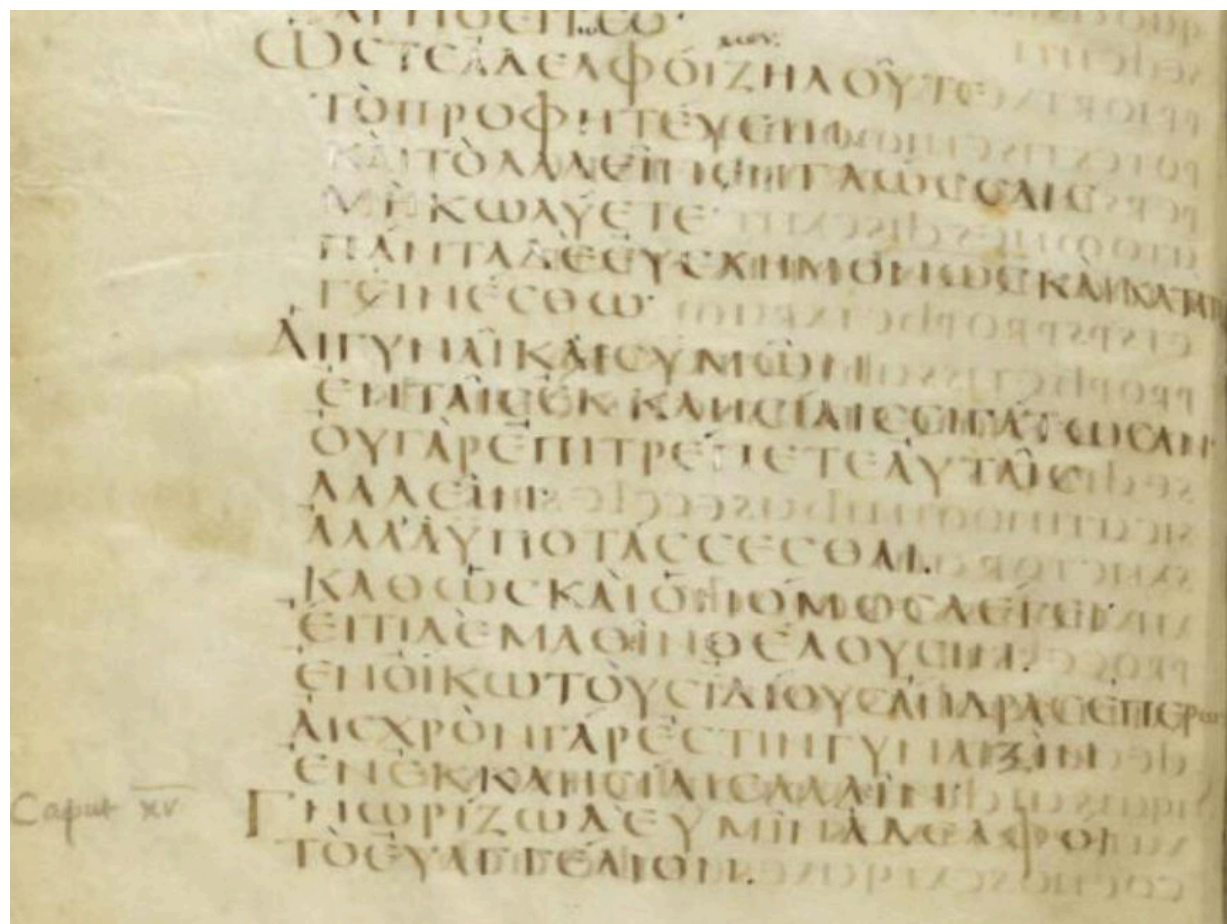
第一に、これらの節は、この章のほかの多くの言明と矛盾しています。

矛盾を避けるために、多くの人々は、パウロが黙らせているのは**ただ**、秩序を乱すおしゃべりだけだ、あるいは1962年に初めて提案されたように²²、**ただ**、**預言を吟味することだけだ**、と言います。しかしこれらの解釈は、この箇所でも三度も強調して繰り返されている無条件の沈黙の要求と合いません。もし34節が預言の吟味だけを禁じているのなら、34節は、35節で**禁じられている**発言をも**許している**ことになります。そもそも、学びたいという思いから質問をすることは、預言を吟味することとはまったく別のことであり、秩序を乱すことはめったにありません。これらの解釈では、パウロはたった今自分が書いたことと矛盾することになってしまいます。

第二に、これらの節は、すべての「西方」系ギリシア語写本では40節の後に続いています。ほかの大多数の写本では33節の後に続いています。

ここにあるのは、6世紀の有名な「西方」系のD写本です。この画像の最初の完全な段落は14章の終わりです。次の段落が34～35節です。最後の段落から15章が始まります。

“Western” Codex D (06) Claromontanus



34～35節が二つの異なる位置に置かれていることは、だれかがこれらの節を欄外に書き、後の写字生たちがそれを33節の後か40節の後に挿入した、ということを示唆しています。説明させてください。

聖書の**元**の本文を確定するための**基本的な原則**は、こうです。「**ほかのすべての本文の成立を最もよく説明する本文が、元の本文である可能性が最も高い。**」

パウロの手紙のどの写本も、はっきりした理由もなく、大きなテキストのまとまりを**これほど遠くへ移している例は一つもありません**。また、初期の読者のだれも、このテキストの位置を批判していません。²³ しかし、写字生が欄外のテキストを本文**の中に**書き写すことは**よくあること**でした。

たとえば4世紀のバチカン写本（Codex Vaticanus）には、マタイの福音書の本文の欄外に古いテキストが記された箇所が20あります。そのうち3箇所を除くすべてが、その後の事実上すべての写本で本文に取り込まれています。

ギリシア人は、女性は公の集会で黙っているべきだと固く信じていました。²⁴ ですから、**紀元200年より前**のある時点で、ある読者がこれらの節の表している「よく知られた、あるいは一般的な知恵」を欄外に書き加えたとしても、ほとんど驚くには当たりません。

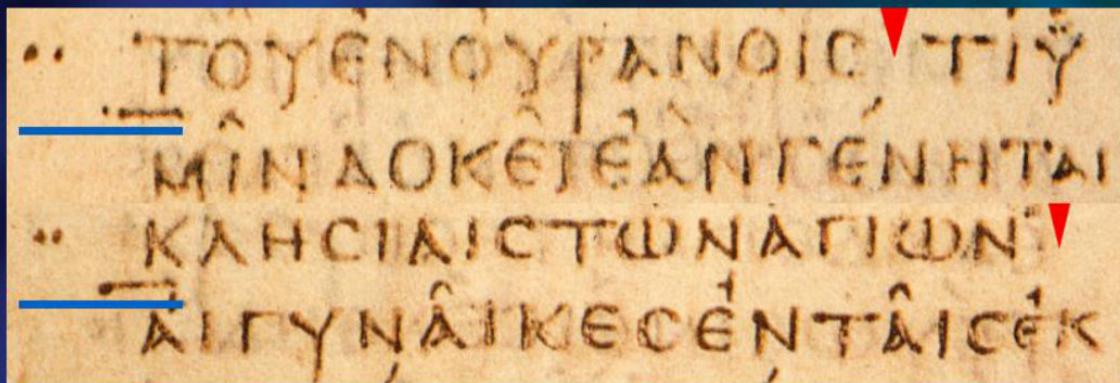
これらの節が置かれている二つの位置について、写字生の知られた慣行に合う**唯一**の説明は、だれかがまずこの二つの節を写本の欄外に書き、後の写字生たちがそれを33節の後か40節の後に挿入した、というものです。

常識的に考えれば、**ありふれたこと**——欄外のテキストを本文に挿入すること——の方が、ほかに一つも例が知られていない**異例なこと**——はっきりした理由もなく、これほど多くのテキストをこれほど遠くへ移すこと——よりも起こりやすいはずです。²⁵

第三に、私たちの最古の聖書であり、その正確さが広く称賛されているバチカン写本は、教会で女性を黙らせるこれらの節を、**真正でない、偽りの**割り込みとして示しています。

下の画像の赤い三角形は、コリント人への手紙第一14章34～35節で元の本文が中断されている箇所を示しています。

Codex Vaticanus (4. Jahrhundert)
markiert 14:34–35 als eine störende Unterbrechung



2 Punkte + Strich zeigen einen störenden Textblock

Die **Roten Dreiecke** zeigen die **Lücke** genau dort an, wo der ursprüngliche Text unterbrochen wurde.

画像出典：Bibliothèque nationale de France（フランス国立図書館）

バチカン写本では15箇所、二つの点と下線が空白とともに、元の本文が中断された場所を正確に示しています。

ほかの写本では、この15箇所すべてに、少なくとも四語からなる割り込みが残っています。このように長い割り込みは、バチカン写本の本文では平均して83.5行に一度しか現れません。

もしこれらの記号が偽りの割り込みと何の関係もないとして、バチカン写本から無作為に選んだ15行を、毎秒休みなく100兆年にわたって選び続けたとしても、15行すべてが四語以上の割り込みと重なることがたとえ一度でも起こる確率は、2000分の1未満です。²⁶

しかも、これらの長い割り込みは、それらの行のどこかに現れるというだけではありません。元の写字生が記した「二つの点と横棒」の記号の15箇所すべてで、まさに空白の位置に現れるのです。

この写字生はイザヤ書の中で三度、横棒が付け加えられたテキストを示すことを説明しています。そしてその三つの例すべてで、新約聖書の15例とまったく同じように、付け加えられたテキストが元の本文に割り込んでいるちょうどその場所に、本文の空白を残しています。本文に空白を残すことができたのは、元の写字生だけです。

「女は黙っていなさい」が偽りのテキストであるというこの写字生の判断は、二つの理由から軽んじることができません。

第一に、ギリシア語新約聖書の二つの標準版はどちらも、「二つの点と横棒」の記号の一つおきに挿入されたテキストのまとまりが真正でない付加であるという点で、この写字生と一致しています。

第二に、これらの付加を含む写本の多様さは、この写字生が、バチカン写本以前の時代の新約聖書のテキストに、今日の私たちよりも**はるかに多く**接することができたことを示しています。

もっとも、34～35節が現存するすべての写本のどこか（つまり33節の後か40節の後）に現れることは確かです。これは、きわめて早い時期の挿入を必要とします。しかし、これらの節を真正でないと示しているのはバチカン写本だけではありません。ヴィクトル司教（Victor）はフルダ写本（Codex Fuldensis）の下余白に、これらの節を省いた訂正テキストを書かせました。また非西方系テキストの写本88（MS 88）は、これらの節を33節の後では省き、40節の後に挿入していますが、それが33節の後に続くべきことを示す記号を付けています。ヴィクトルのコリント人への手紙第一の本文証拠にはこれらの節が現れないので、ダン・ウォレス（Dan Wallace）の「これらの節はコリント人への手紙第一のすべての本文証拠に現れる」という主張は正しくありません（<https://bible.org/article/textual-problem-1-corinthians-1434-35>）。本文研究者は、同じ一つの写本の中の異なるテキストに、異なる写本記号を割り当てます。14章34～35節は、これらの別々の写本記号によって区別されるすべてのテキストに現れるわけではありません。**14章34～35節の本文がすべての写本によって「支持されている」というのは、正しくありません。**

ウォレスは自らの誤った前提に基づいて、「これらの節は伝承の最も初期の段階で本文に紛れ込んだに違いない……元の文書の中に」と反論します。そのようなことがありうるのは、エペソ人への手紙5章22節に「従う」という動詞が**すばやく**取り入れられたことから分かります。²⁷ このことは、34～35節の付加が2世紀のかなり後の時期までに、現存するすべての写本に入り込んだことを容易に説明できるでしょう。

多くの指導的な本文研究者は、パウロはこれらの節を書かなかったと結論づけています。²⁸ デイヴィッド・ベントリー・ハート（David Bentley Hart）によるギリシア正教の新しい翻訳は、これらの節を「ほぼ確実に真正ではない」として退けています。ドイツ聖書協会の新しい聖書には、これらの節は「パウロが11章で述べていることと矛盾しており」、「おそらく後の挿入」とであると書かれています。（「BasisBibel〔ドイツ語聖書翻訳〕。引用：14章34節 34～35節は、パウロがコリント人への手紙第一11章2～16節で教会における女性の役割について述べていることと矛盾している。これはおそらく後の挿入である。」）

この四つの反論について、聖書が本当に教えていることをもう一度まとめてみましょう。

1. 男性と女性は**共に**指導すべきです。
2. 女性は教会で教えることができます。
3. パウロは**すべての**信者に、**監督**の職を目指すよう励ましています。
4. 聖書は女性に、教会で**語り**、さらには預言することを勧めています。

権威を男性に限るものだと思っていたこの四つの理由を詳しく調べてみると、聖書はむしろ、女性も男性も、神が賜物を与え導かれるとおりに、等しく自由に指導してよいと教えていることが分かります。

女性を指導に加えることに対するこの四つの反論の問題は、それが拠りどころとしている聖書箇所どれも、実際にはそれを裏付けていない、ということだけではありません。決定的な問題は、聖書のきわめて多くの**根本原則**が、これに**真っ向から対立**していることです。その中には、男性と女性が**対等**であるという、パウロの次のような神学的原則が含まれます。

両者とも等しく**神のかたち**に造られています。

両者とも等しく、地を**治める**ように定められています。

両者とも**創造の祝福**を与えられています。

両者とも**創造の使命**を与えられています。

両者とも**キリスト**にあって同じ権利を持っています。

教会における**互いに従う**ことは、男性と女性の平等を前提としています。**結婚**における**互いに従う**ことも同様です。

キリストのからだ**が一つである**こと、

すべての信者が祭司であること、

キリストにある**自由**、

すでに始まっている**新しい創造**も同じです。

御霊は**すべての**信者に奉仕のための賜物を与えます。

奉仕としての教会の指導の本質は、男性にも女性にも**等しく**当てはまります。

パウロは、男性と女性が祈りと預言において礼拝をどのように導くべきかについての結論を、コリント人への手紙第一11章11節で、議論を打ち切って**大切な**ことを強調するために繰り返し用いる語によって導入しています。²⁹「とはいえ、主にあっては、女は男なしにあるものではなく、男も女なしにあるものではありません。」ガラテヤ人への手紙3章28節も同じように言っています。「……男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」

パウロの言葉づかいと並行箇所から、これが教会のことを述べていると推測できます。彼はちょうど、ペテロが異邦人との食卓の交わりから身を引いたことを、それが福音に反するという理由で叱責したところでした。すべての女性を教会の指導から締め出すことは、確かにそれ以上に、福音とキリストにある私たちの一致に反しています。

注

1. LSJ9 801; D. Dhimitrakou, Μεγάλη Ἑλληνικὴ Οὐλὴς τῆς Ἑλληνικῆς Γλωσσῆς (9 vols.; Athens: Oikos Dhimitrakou, 1933–1950) 5:3880 [using the OdysseaUBSU font from LaserGreek in Unicode linguistsoftware.com)].

2. Moulton と Milligan、Friedrich Preisigke、Pierre Chantraine、S. C. Woodhouse、E. A. Barber、R. Renehan、P. G. W. Glare による LSJ の補遺、そして Richard S. Cervin が "Does Kephālê mean 'Source' or 'Authority Over' in Greek Literature? A Rebuttal," *Trinity Journal* 10 NS (1989) 85-112 の86-87頁で挙げている13の追加の辞書。
3. ラールフス (Rahlfs) 版およびゲッティンゲン版の七十人訳 (LXXとも呼ばれます) に見られる、最もよく証言されたヘブライ語聖書のギリシア語版を指します。私たちの英語聖書は、そのほとんどを「頭 (head)」と訳しています。たとえばNASBは116回、ASVは115回です。英語では「leader」が「head」の一般的な意味だからです。
4. eis kephalên
5. たとえば士師記11章11節では、「かしらとして」の後に「彼らを治める者として」という付加があるので、「かしらとして」に、ギリシア語の読者には本来はつきりしなかったであろう意味が与えられています。
6. 「かしら (κεφαλή)。このかしらから (ἐξ οὗ) からだ全体が……成長します」(コロサイ人への手紙2章19節、エペソ人への手紙4章15~16節)。コロサイ人への手紙1章18節はこう説明しています。「御子はそのからだである教会のかしら [αὐτὸς ἐστὶν ἡ κεφαλή] です。ὁ ἐστὶν ἡ ἀρχή、すなわち「からだのいのちの源」[『起源』(NEB)]」です (TEV/GNT)。1章16~17節:「なぜなら、万物は御子にあって造られたからです……万物は御子によって……造られました……万物は御子にあって成り立っています」……「十字架の血によって」(1:20)、キリストは「あなたがたを、御子の肉のからだにおいて、その死によって和解させていただきました」(1:22)。コリント人への手紙第一11章3節abc、4節b、5節b。エペソ人への手紙1章20~22節の空間的な表現に注意してください。「天上で……はるかに高く……下に……キリストを、すべてのものの上に立つかしらとして教会 [τῇ ἐκκλησίᾳ] に与えられました。」コロサイ人への手紙2章9~10節:「なぜなら、この方 [キリスト] のうちに神の満ち満ちた性質が形をとって宿っており、あなたがたは、すべての支配権の冠であるこの方にあって、いのちの満ち満ちた豊かさに至っているからです。」
7. 新約聖書のこの語の同族語はすべて指導を指しています。Philip B. Payne, "What About Headship? From Hierarchy to Equality", in *Mutual by Design: A Better Model of Christian Marriage* (E. Beyer 編; Minneapolis, MN: CBE 2017) 150-152頁を参照。
8. Cf. especially Eldon J. Epp, *Junia: The First Woman Apostle* (Minneapolis: Fortress, 2005) 110-21 and Richard Bauckham, *Gospel Women: Studies of the Named Women in the Gospels* (Grand Rapids: Eerdmans, 2002) 165-186.
9. これは、なぜパウロがエペソの女性たちに、男性を教えるために権威を奪い取ることをはっきり禁じたのか、そしてなぜこの箇所に「女は……学びなさい」という命令形が含まれているのか (テモテへの手紙第二章11節) を説明します。
10. 紀元370年ごろ、聖バシレイオス (Basilus) 『書簡』69、45行:「彼 [ローマの司教] は、旅の労苦に耐える人々を選ぶことによって、この件について自ら全権 [αὐθὺς ἐν τῇ σι] を行使することができる。」Roy J. Deferrari, *St. Basil* 2:40-43 (LCL)。
11. Philip B. Payne, "1. Tim 2.12 and the Use of οὐδ' ἐ to Combine Two Elements to Express a Single Idea", *NTS* 54 (2008): 235-53 は、パウロによる οὐδ' ἐ の用例をすべて検討しています。Philip B. Payne, "Οὐδ' ἐ [oude] Combining Two Elements to Convey a Single Idea and 1 Timothy 2:12," in *Missing Voices: Broadening the Discussion on Men, Women, and Ministry*, ed. Hilary Ritchie (Minneapolis: CBE International, 2014), 24-34 は、反論に答え、ギリシア文学における οὐδ' ἐ のこの用法を例証しています。
12. Exodus 15:21; Judges 5:2-31; 1 Samuel 2:1-10; 25:24-31; Proverbs 31 (31:1 "an inspired utterance his [King Lemuel's] mother taught him" NIV) and Luke 1:25, 42-45, 46-55, 箴言31章
13. C. E. B. Cranfield, *The Epistle to the Romans* (ICC; Edinburgh: T&T Clark, 1979) 2:781.
14. これは、すべての信者に監督の職を目指すよう励ましています。
15. Douglas J. Moo, "The Interpretation of 1Timothy 2:11-15: A Rejoinder," *Trinity Journal* 2 NS (1981) 198-222, at 211; Thomas R. Schreiner, "Philip Payne on Familiar Ground: A Review of Philip B. Payne, *Man and Woman, One in Christ: An Exegetical and Theological Study of Paul's Letters*" *JBMW* (Spring 2010) 33-46, at 35.
16. 墓碑銘から、この慣用句が忠実さを表していることが分かります。
17. したがって、この慣用句の中の一語が別個の要件としても機能すると主張することは、慣用句を誤用することであり、二重の意味を必要とします。慣用的な表現から一語だけを切り離し、その語を別個の要件として解釈するのは誤りです。

18. クリュソストモスはこう書いています。「11節は女性一般について語られていると考えた人々もいるが、そうではない。なぜ彼が、自分の主題を中断してまで女性について何かを持ち込むだろうか。彼は女性執事の地位にある者たちについて語っているのである。」NPNF1 13:763; NPNF1 13:116。
19. The Analytical Greek New Testament の共著者であるティム・フライバーグ (Tim Friberg) が、ギリシア語新約聖書全体を二次数えた結果に基づいて、これらの数字を出しました。
20. G. H. Hugenerberger, "Frauen im kirchlichen Amt: Hermeneutik oder Exegese? A Survey of Approaches to 1 Timothy 2:8-15" JETS 35/3 (1992) 341-60, 360頁 注78:「男性を想定した用語を用いる規範は、一般に、両方の性を含むものとして解釈されるべきである。」
21. バチカン写本 (Codex Vaticanus B)。新約聖書の最も信頼できるギリシア語写本として広く認められています。
22. W. Klein, "The Church and the Prophets," ATR 44 (1962) 8.
23. Ulrich Schmid, "Conceptualizing 'Scribal' Performances: Reader's Notes," in The Textual History of the Greek New Testament: Changing Views in Contemporary Research, ed. Klaus Wachtel and Michael Holmes (Atlanta: SBL, 2011), 49-64, at 62, 50, 58: Readers ... react[ed] to what they read by adding comments in the margin. ... こうした書き込みの一部は、そのように「装飾された」[写本] を書き写さなければならなかった写字生によって、本文の中に書き写されたのかもしれない。... 少なくとも古代の人々の観点からすれば、写字生の傾向は、欄外の書き込みを本文に取り込むことにあったようである。」
24. たとえば、プルタルコス、アリストファネス、アリストテレス、ソフォクレス、デモクリトス、アイリオス・アリストイデス、そして多くのラビたち。
25. これは「転写上の蓋然性」と呼ばれます。これは独特なケースです。私たちがこれを欄外のテキストと認める主な理由は、ほかのテキストの信頼性を損なうものではありません。
26. もし横棒と点が挿入と何の関係もないとすれば、15行すべてのどこかでこれが起こる確率は、 83.5^{15} 分の1です。これは 6.6880134×10^{28} 分の1未満です ($10^{28} = 100兆 \times 100兆$)。1年は31,536,000秒です。
27. 事実上すべてのギリシア語版が示しているように、エベソ人への手紙5章22節の最古の写本には「従う」という動詞がありません。ヒエロニムス (Hieronymus) の注解には、ギリシア語写本では22節で21節の「従う」という動詞が繰り返されることはない、と書かれています。UBS版の本文では、「従う」が後から付け加えられたことは「ほぼ確実」だとされています。22節のどこかに「従う」の何らかの形が現れる最初の写本であるシナイ写本 (Codex Sinaiticus) は、紀元360年ごろに書かれました。しかしそれ以降、現存するすべての写本が「従う」を含んでいます。後の写本で「従う」を削除したものは一つもないので、「従う」が最古の写本のすべてから削除されたというのは考えにくいことです。パウロはこう書いたのです。「キリストを恐れて、互いに従い合いなさい。妻たちよ、自分の夫に……」。したがって、妻が従うことは、その動詞を「互いに従い合う」に依存しています。相互代名詞は、互いに従うことを必要とします。ですから、これは上位者への服従を指すことはありません。ここで「従う」とはむしろ、「愛において自発的に譲るという意味での服従」を意味します (BDAG 1042)。コロサイ人への手紙3章18節では、妻は「主にあってふさわしいこととして」従うように言われています。聖書が妻の服従について挙げている理由は、神によって定められた性の階層ではなく、「神のことばが悪く言われることのないようにするため」[テトスへの手紙2章5節]、つまり文化的な規範に反しないようにふるまうためです。次の箇所と比べてください。「たとえ、ある夫たちがみことばに従わなくても、妻の行いによって、ことばによらずに勝ち取られるためです……夫たちも同じように[自分の妻に] 従い、互いに賢明な関係のうちに共に暮らし、妻をより弱い女性の [BDAG 208, gynaikeios, 「女性の」] 尊い器として認め、いのちの恵みを共に受け継ぐ者として受けるにふさわしい尊敬を払いなさい。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです」[ペテロの手紙第一3章1節、7節]。
28. Philip B. Payne, Man and Woman, One in Christ (Grand Rapids, MI: Zondervan, 2009) 226-227頁は、この結論に達している55の研究を挙げています。その中には、最も著名な福音派の本文研究者であるゴードン・フィー (Gordon Fee) や、最近ではリチャード・フェローズ (Richard Fellows) が含まれます。ローマ・カトリックの指導的な学者ジョセフ・フィッツマイヤー (Joseph Fitzmyer) は、「今日の解釈者の大多数」が、これは後の付加であると結論づけていると述べています。本文研究者のキム・ヘインズ=アイツェン (Kim Haines-Eitzen) は、これは「今日ほとんどすべての学者」が言っていることだと述べています。
29. BDAG 826、「議論を打ち切り、本質的なことを強調する」; A. T. Robertson, A Grammar of the Greek New Testament in the Light of Historical Research (Nashville, TN: Broadman Press, 1934), 1187頁、Blass を引用して "to single out the main point." BDF § 449 (234頁)「パウロにおいて、議論を締めくくり、本質的なことを強調するために。」